

談 話 室

「教養」ということにこだわって

岡 屋 昭 雄

1

「教養」ということを、一般教育のありようにこだわって論及してみたい。日本に於いてもともと、「教養」という概念は、多様に解釈され、それどころか否定されかねない傾向にさえある。つまり、専門ということに性急であって、その基礎にある教養ということが等閑視されているのである。

したがって、一般教育に対する学生の意識は余分の単位をとらなければならない、自分の専攻との関連が見出せない、等々のそれゆえに、単位のとりやすい講義を履修することで間に合わせよう、とする傾向がある。

ところで、大学に入学するまでに、大学に入学するための受験課目の学習に追われてしまって、教養という概念、理念を身につけていないことはもとより、趣味と教養とを混同してしまっているのである。

そこで、一般教育の内実を明確にしておきたい。

……知・徳・体の調和的発達を図るためにギリシャ人が設定した、文法・修辞法・論理学・算術・幾何・天文学・音楽から成る七自由科はその後も長く人間的教養の内容をなすものと考えられていたが、科学技術の進歩、民主主義の発達、労働者階級の勃興は、そのよって立つ社会的

基盤を根底からくつがえすことになり、やがて社会的身分、経済的境遇、人種、性別、信条にかかわりなく、すべての人々に自由社会の一員としての資質、教養を与えることの必要性が痛感されるようになり、その内容も健康、コミュニケーション、科学、技術、芸術、政治の各分野にわたって多岐に考えられるようになった。(中略)

わが国では、戦後、アメリカ教育使節団報告書の勧告に基づき、大学基準協会が累次の研究を重ねて、大学における一般教育の比重を大きくすることに力を尽くしたが、最近では、それが専門教育の不徹底を招来したという批判も一部には強く、この一般教育と専門教育との関係をめぐる古典的命題は、技術革新の影響とも結びつけて再検討を迫られている。^(注1) 以上のことから明らかなる如く、戦後アメリカの教育使節団報告書の勧告書に基づいて設定されたものであり、とりわけ現在のように社会の目まぐるしい変転の時機に於いては、一般教育の持つ意味・意義の見直しが求められるであろう。

もとより、各大学に於いて、社会、あるいは学生の要望に基づいて総合科目として位置づけられ、「瀬戸内海文化論」「児童文化論」「日本の思想・文化」「異文化比較論」

等の講座が開設されている。そして、複数の教官によって総合的視野でもって魅力的な講義になり得ている場合もあり、また一方では統一のある体系性に裏づけされた学問になり得ていない場合もある。

いずれにしても、一般教育に対する学生の認識も教官の理解も十全になされていないのが現状であろう。

2

筆者自身も2年前に「一般文学」の講義を担当し困惑したことを想起する。専門が違う学生に「文学」の講義をして、専門の基盤をつくるためには、ひとつには、論文の書ける基礎的技能と、もう一方には学問的論争のできる話し方を身につけることを狙った。そのためには、高等学校で学習した文学史、文学作品の指導を基礎に据えた文学思潮史・文学思想史を講義することにした。漱石の則天去私・非人情主義の思想、鷗外の諦念の思想、言文一致の運動、文語詩から口語自由詩へ、白樺派の文学運動がたんに文学運動に止まることなく新しい村運動までに発展したこと、さらに、家族主義からの人間の解放、個人の自由の獲得に至るまでの近代文学の課題を追求した。このことはつまり、時代の思想を背景として人間の解放の歴史であることを位置づけた。一方には「現代を生きる孤独」をどう超克するか、愛の不毛、現在および将来をどう生きていくか、ということを文学的認識の中核として論じた。どう生きてよいかわからない、将来の展望が見えにくい現状をどう打破していったらよいかをも含めて語り合った。

確かに現在の学生たちは本を読まない、書かない、他人の意見に耳を傾けようとし

ない、あまつさえ私的なおしゃべりでは済むのだが公的な討論・発表ができなくなっている、という現実を無視することはできない。それ故に、大学でさえも、生徒指導が必要になったと切実に思う。精神的に不安定になる学生も増加している。つまり、大学に入学したとたん目的を見失っている学生が増加している現実を凝視することが必要となる。したがって、個に応じた指導を徹底するために、毎時間、短いレポートを書かせたり、時として、学生自身の内面を書かせたりした。さらに、グループを組んで討論して、その結果をリーダーが発表することも実施した。つまり、一方的な講義形態をとるのではなく、学生からの反応・意見も取り入れた講義にした。

ところで、グレート・ブックス運動は、エッセンシャルリストの立場にあるハッチンス(R. M. Hutchins 1899~)が、120冊の名著を選び、シカゴ大学の一般教養コースで、学生に読ませる運動を狙い、全米に広がり、図書館で名著を読むサークルができた、という。しかし、現代という時代を生き抜いていく120冊の名著を選ぶということは容易なことではない。

にもかかわらず、筆者は現代の学生がイニシエーション(通過儀礼)として、読書による死と再生を通して別人となつてほしいと思う。そのためには、学生と教官が一緒に^(注2)なつて、己れの生きる主体とかかわりつつ、かつまた、己れの可能性とかかわつて、読書することの主体を回復したい、と思う。

このこと背景なしには、一般教育は効果を挙げることは不可能であろう。それと、もう一方には、現代の曖昧な教養の概念を明確にしなければなるまい。純客観的な概

念をつくろうとすれば、かつまたそんなものは存在しないであろう。あえて主観的な立場に立った教養の概念、つまり、教養の概念を背景にした読書運動を推進することであろう。

3

前章までで、教養の概念が曖昧なままに一般教育が実施されても、学生の生きる主体は創造されないことを述べた。さらに、一般教育に対する専門教育にも響かないであろうことについて述べた。

そこで、読書運動を核にした教養概念の獲得を中心にして一般教育を構築したいと思う。

にもかかわらず、学生が自らの生きる姿勢を鮮明にしなければ実効が薄いことも事実であろう。

いずれにしろ、筆者の一般教育充実のための試案を示したい。

もともと教養という概念は上から一方的に決めつけるものではなく、生きる主体の経験の総量によって決定される性格のものであろう。とりわけ知の枠組(クーンのいうパラダイムもこの中に入る。)の改変の時に当たって大変なことはわかる。

まず、教官の講義力の魅力の回復ということが緊要であることはもとより、講義の内実がすぐれてその教官の得意とするものであることは当然であるが、現代のように生と死のあわいが明確でない、人間の生き方が見えない、ことばが人間にとって何であるかが見えない、等々。以上の現実を踏まえることは当然のことながら、その根底にある「人間学」が問題にされねばならない。カッシーラーの『人間』はもとより、多くの著書があるので、学生の読書には事

欠かないはずである。「人間の危機」ということが叫ばれはじめてから既に久しいのであるが、人間の心と体のバランスの問題についても河合隼雄氏の論述はかいろいと論じられている。さらに、M. エリアーデ『生と再生—イニシエーションの宗教的意義—』(東京大学出版会 1971年)なども取り上げてみたい。エリアーデ全集も出版されていることだし。ここまで述べると、宗教学も取り上げなければなるまい。

最近問題となっている「時間論」になると哲学の領域となるであろうが、児童文学の世界でも生きられる時間の回復というテーマが多くなっている。いわゆるファンタジー作品がそれであるが、M. エンデの『モモ』『鏡の中の鏡』『はてしない物語』、イギリスのフィリップ・ピアスの『トムは最夜中の庭で』などから時間というものを持つ内実を分明にすることも考えられる。思想史ということも人文、社会、自然の各分野に亘っておさえておかねばならない問題であろう。つまり、思想、哲学の背景なしに、もはや学問が論じられないとさえ言える状況になっている。

学際的研究ということが叫ばれてからすでに久しい。またそれなりの学問の進歩もしているのであるが、まだ己れの学問分野にしがみついている所はないであろうか。それよりも何よりも目の前にいる学生たちの現状が見えないところでは講義が成立しないことは当然であろうが、何よりも学生が主体的に目覚めることなしに一般教養が成立しないことを肝に銘じたい。

最後に一般教育、とりわけ教養というものがどこかにあるものを教えるのではなく、これから創造していくものであることを述べてこの稿を終りとす。

(注)

(注1) 『教育事典』(小学館 昭和41年)

18 Pによる。

(注2) 『生と再生——イニシエーションの

宗教的意義——』(東京大学出版会
1971年)の4 Pに次のような記述がある。
「イニシエーションという語のいち
ばんひろい意味は、一個の儀礼と口頭
教育(oral teachings)群をあらわす
が、その目的は、加入させる人間の宗
教的・社会的地位を決定的に変更する

ことである。哲学的に言うなら、イニ
シエーションは実存条件の根本的変革
というにひとしい。修練者(novice)
はイニシエーションを受ける以前に
持っていたものとまったくちがったも
のを授けられる、きびしい試練をのり
越えて、まったく「別人」となる。」

以上のことから一般教育をひとつ
のイニシエーションと位置づける人間
として別人となる機会と抱えることが
できるであろう。

忘れ得ぬ講義

「諸君は、専門家になる訳ではない。し
たがって、細かな事は教えない。私は、自
分自身が半生を費した研究の大綱を述べる
ことにしたい。」

大学時代に、私が最も感銘を受けた牧角
先生の講義は、こんな挨拶から始まった。

当時、九州大学法学部では、四年生を対
象とする法医学の講義が開設されていた。
この講義を担当された教官が、九州大学医
学部教授の牧角先生であった。この科目は
履修が強制されておらず、受講は学生の自
由意志に委ねられていた。四年生は、ほぼ
全員が前期までに卒業に必要な単位を修得
しており、後期には、ほとんど大学に姿を
見せなかった。

ところが、牧角先生の講義だけは例外で
あった。回を重ねる毎に受講生が増え、最
後は席に座れない者まで出たのである。大

講義室は、四年生で埋め尽くされた。

なぜ、牧角先生の講義が、学生を魅了し
たのであろうか。先生の講義の内容を紹介
しつつ、その理由を考えてみたい。

先生の講義は、スライド写真の映写が中
心であった。様々な事件で亡くなった方々
の死体の解剖写真を上映し、解説を加える
というスタイルであった。

スライドによる講義は、法学部の学生に
にとっては初めての体験であり、しかも、そ
の内容は、交通事故から自殺に至るまでの
死体のオンパレードである。これだけでも
学生の関心を引きつけるには十分であっ
た。

ところが、先生の講義は、私たちの単なる
好奇心を満たすだけのものではなかった。
先生は、私たちに科学的な思考をする
訓練をして下さったのである。

先生は、毎回、レポートの提出を受講者に義務付けられた。講義の終了間際に上映されたスライド写真を素材として、死の原因と形態をまとめるのである。私たちは、死体が発見された状況の説明を聞きながら、探偵になったような気持ちで現場写真を見つめた。そして、A4版のレポート用紙に、死因は何か、自殺か他殺か事故死かを述べ、そのような判断を下した理由を書くのである。

すると、先生は、私たちのレポートを毎回丁寧に講評して下さいたのである。優秀なレポートを紹介するとともに、悪文の典型のようなレポートや誤字・脱字まで、スライドで上映された。

教官が、教室で一方向的に話すという講義に慣れていた私たちにとって、このような応答のある講義は新鮮であった。自分の書いたレポートが、どのような評価を受けるかに胸をワクワクさせながら、熱心に講義を受けたものである。

今にして思えば、三百人近い学生のレポートを毎回読まれることは、大変な御苦労があったのではないかとと思われる。しかし、先生の御努力のおかげで、私たち受講生は、講義を受ける楽しさを満喫したのである。

「発心真実ならざれど正境に縁すれば功德なお多し」という言葉があるが、先生の講義は、この言葉がぴったりと当てはまるのではなからうか。先生は、死体の写真を見たいという好奇心から受講した学生に対して、文章の書き方から科学的な思考まで教えて下さったのである。

今年の十月から、一般教育の講義を担当する私にとっては、牧角先生の講義のスタイルは、お手本であり理想でもある。学生の知的関心を引き起こし、学ぶ楽しさ、考える喜びを伝えられる講義をとの思いを胸に秘めつつ、講義の準備に追われる今日この頃である。

心理学のイメージ

有馬道久

心理学の講義を初めて受ける時、学生諸君はどんな内容を予想し、そして期待しているのだろうか。

こんなことを考えていて、ふと自分自身の入学の時を思い出した。4月初めのオリエンテーションの時だったか、ある先生が、心理学の専攻動機を話すよ言われた。学生番号順ということで最初に指名された私は、正直なところ心理学にどんな領域があ

るのかほとんど知らなかったし、具体的な動機などないに等しかったので、あわてて受験科目が合っていたのでと的はずれな答をして失笑をかってしまった。その後の人はというと、フロイトの著作を読んで、人間の無意識について興味を持ったのでとか、福祉関係の仕事に就きたいからなどと、それらしい答えをしている人もいる。学生番号がもっと後であれば、少しは気のきい

たことを言えたのと思いながらも、これは大変なところに入ってしまったというのが、その時の正直な感想だった。

あれから10数年、いまだに心理学を続けているのだから水が合っていたのかもしれない。

ところで、現在私は、実験や検査の実習は別とすれば、講義というものを担当していない。どんな内容をどのように講義すればよいのか、これからの課題である。そこで、自分の学生時代のことは棚にあげて、冒頭の疑問を直接聞いてみることにした。答えてくれたのが心理学の専攻生で、しかも40名という人数では、全体の傾向といえるかどうかかわからないが、結果は次のようなものであった。

まず最初に、「大学に入学するまで、心理学とはどんなものだと思っていましたか」と回想的にたずねた。すると、「人の心の動きを読み取るものだと思っていた」という回答が最も多く、40名中20名、ちょうど50%に達している。ある程度予想された結果ではあるが、この答はいったいどこから出てくるのだろうか。世の中には、何々の心理という文字がよく目につく。そう言うだけでなにかしら法則らしいものがあるような気がしてくる。試しに何冊かの雑誌や本を手にとってみると、いくつかの類型が出され、それぞれの性格特徴が書いてあったりする。だが、どうしてそうなるのかについて書かれているものは少ない。おそらくこの何かよくわからないが人の性格を見分けるものがあるのだろうという気持ちが、人の心を読み取るという答に結び付くのもかもしれない。ある本によると、教養課程における心理学の授業の力点の1つは、心理学に対するあやまったイメージ・偏

見・過大な期待を除去することであるという。そのためには、いわゆる通俗心理学のように結論だけを呈示するのではなく、それが得られる過程—研究の方法—を大事にしなければならぬということになるだろうか。

次に多かったのが、「心理状態や行動様式を研究、分類するもの」(33%)、「心理テストなどによる性格判断」(18%)などであった。この辺になるとかなり実際の心理学の内容に近くなっていく。しかし、やはり人の性格に関連するものというイメージが強いようである。ひとつには自分自身の性格や他人からの評価が気になるという青年期の特色が反映されているのかもしれない。

では、実際に心理学の講義を受けた感想はどうだっただろう。併せて聞いてみた。最も多かったのは、「範囲が広い」(30%)という感想だった。授業では、おそらく性格だけではなく、歴史・研究法・知覚・学習・思考・社会的行動……と多くの分野が取り上げられただろう。この範囲の広さを視野が広がったと受けとる人もいるが、逆にとまどったとか掴みどころがないと感じた人もいる。1人の人間をいろんな側面からみる心理学のやり方は、ある意味で確かに掴みどころがないといえるかもしれない。他の感想としては、「科学的」(20%)というのがあった。アプローチの仕方が、分析か、それとも数値が多いことなのか、書かれていることからだけではわかりにくい、いずれにしても回答の中にあつた「科学的という言葉から最もかけ離れている学問」という予想とは違っていたようだ。

過程を大切にしながら、かつ広範囲のことを伝える。限られた時間の中で、この2つを満足するのはかなり難しいことだと

感じつつ、そして、人の心が読みとれるなんてそうできるもんじゃないとわかった時

のあてのはずれた顔を思い浮かべながら回答を読ませてもらった。

再 帰 的 授 業

小 松 伸 一

本学に赴任して1年半。現在、一般教育の心理学と教職科目の教育実践演習を担当している。教育学部の教育実践研究指導センターに所属し、とりわけ教育実践演習の中では「授業」についての授業を行う。経験不足の新米教師ゆえ、とまどうこと、反省させられることも多い。1年半、講義をしてみて感じたことを、以下に書き連ねてみる。

鏡。コクトーの映画「オルフェ」の中で、黄泉の女王マリア・カザルスは、鏡を通じて黄泉の国と現世を行き来していた（その冷冽な美しさが印象的だった）。黒手袋をはめた手を鏡にかざすと、風を受けた湖面のように鏡の表面が揺らぎ始め、黄泉の国への通路が開ける。詩人の目にも鏡は、現世のものとは思えない魔訶不思議な存在に映ったのかもしれない。この鏡に鏡を映してみる。つまり、2枚の鏡を向い合わせに置く。すると、鏡の中に鏡が映り、その映された鏡の中に鏡が映り、その映された鏡の中に鏡が映り、……。あるいは、ミルク缶の記憶。そのミルク缶には少女が描かれていた。その少女はミルク缶を胸に抱えていて、その抱えられているミルク缶には少女が描かれていて、その少女はミルク缶を抱えていて、その抱えられているミルク缶には少女が描かれていて、……。

エピメニデスのパラドックス。たとえば、

この枠内に書かれていることは誤り

という命題。これは真か偽か。とりあえず、この命題が真であると仮定してみる。「この枠内に書かれていることは誤り」という命題をPと置くと、この命題は「Pは誤り」と表現できる。「Pは誤り」が真であるということは、最初の仮定「Pは真」であることと矛盾してしまう。では、偽であると仮定した場合。「Pは誤り」が誤り（偽）であるということは、「Pは真」を意味する。この場合も、「Pは偽」という最初の仮定と矛盾を引き起こす。

$n!$ を求めるコンピュータ・プログラムを作る。 $n!$ は、 $n=0$ の時1であり、 $n>0$ の時 $n(n-1)!$ と定義される。LISPという言語を用いて、これをプログラムしてみる。

```
(defun factorial (n)
  (cond ((zerop n) 1)
        (t (times n
                  (factorial (sub1 n)))))
```

ある関数 (factorial (n)) を定義する際、定義の中でその関数を呼び出す。これ

は一般に、再帰的定義と呼ばれる。プログラミングの素人にとっては習得が容易なのに、BASICやFortranに熟達した腕に覚えのある者にとっては馴染みにくいといわれているプログラミング技法である。

さて、講義をしてみたの感想を述べるはずだった。鏡の中の鏡。ミルク缶に描かれたミルク缶。エピメニデスのパラドックス。再帰的プログラミング。事象こそ違え、これらは自己言及という点で共通している。それはまさに、教育学部の教育実践研究指導センターに所属し、時には「授業」についての授業、つまり教育をしている私自身の姿と同型である。

上記のいくつかの例は自己言及という点

で共通しているが、 $n!$ のプログラムだけは、実は他の例と大きな相違がある。鏡の中の鏡、ミルク缶に描かれたミルク缶、エピメニデスのパラドックス、これらはいずれも無限循環のブラックホールに吸い込まれてゆくのに対し、 $n!$ だけはそれを免れている。関数が自己を呼び出すごとに引数の値が変化し、引数がゼロとなった時、ブラックホールから抜け出し、解が求まる。「授業」についての授業を行うという自己言及的試みが、無限循環のブラックホールに吸い込まれてゆくことを意味するのか、あるいは、いつしか引数の値がゼロとなり解の発見に到達するのか、新米教師には未だわからないままである。

一般教育に関する議論をめぐって

小池和男

先日朝日新聞(1986年12月4日付)の読者欄に、一般教育をめぐる議論がまとめて掲載されているのが目についた。ある高校生の「大学に進学したいけれど、大学の一般教養の二年間には疑問を感じる」、したがっておそらく専修学校へでも行こうかという意見を受けてのもののように思われる。二人の大学卒業直後の投稿者が意見を述べているが、二人とも体験を通して、一般教育の意義を十分に認めているように思われる。しかしながら、大学の立場から検討を要するいくつかの問題提起が含まれるように思われるので資料として掲載しておくことにする。

とくに一般教育の意義の一つとして扇谷

氏が強調される「専攻と平行して自分の専攻とちがうmethodogyがあることを学ばせることの意義(とくに後期一般教育として)」は、これらの投稿者がともに認める場所であるように思われる。それとともに飯島宗一氏が強調される「専門教育のスタイルが一般教育のねらいとしているものを積極的に取り入れていく」幅の広さをもつという姿勢も必要であろう。

一、二年前のことになるが、「知的水準」の“N”流の諮問委員会が一般教育廃止の意見を出して話題になったことがあるが、彼らの発想は、最初の投書の高校生のそれとほぼ同一水準のものであるように思われる。このような意見は論外とし

ても、一般教育が多くの問題をかかえていることは確かである。「大半の学生が教養課程を無駄に過ごし、大学の卒業すれば偏った知識しかもたない人間をつくりだしてしまう現状を、大学関係者は見直してほしいと思います。」この要望に対してわれわれはいかに応えるべきであろうか。

以下は、その「資料」である。

1. あとで知るムダの価値

先日、「大学に進学したいけれど、大学の一般教養の二年間には疑問を感じる」という高校生の意見が掲載されました。

確かに、私も初めは一般教養というものが疑問でした。やたらと必須（ひっす）の授業が多く選択できるといってもまったく興味のないものも多々ある。また、専門と違って大教室でのマイク授業が多く、大学の授業に夢を抱いて入学した当時の私は失望し途方にくれたものです。

けれど、四年間が過ぎてみてやっと大学の本当の意味を知りました。大学というところは、実用知識と実用技術で構成されたムダのない濃密なカリキュラムを与えられる専門学校とは、目的も性質も違うのだ、と。

一見、ムダに見えて専門科目にはまったく関係のないことも幅広く吸い上げ、自分自身のフィルターを通しておく。これは決してムダなことではありません。それぞれの学問体系を知ることで、他分野の知識も生きてくるし、幅広く垣間見た他学問のとらえ方や方法は、普遍的で専門科目の中でも生きてくる。

一般教養はムダな二年間かもしれませんが。けれど大学のよさは、そのムダなのです。いや、もっと言えば大学には、そのム

ダが必要なのです。

私は、みんなが行くからではなく本当にそれだけの価値があるから、という認識で“大学”を選んでほしいと思います。女の子なら短大の方が、就職にも結婚にも有利と言われますが、私は自分が四年制に行ったことを少しも後悔していません。

(OL 23歳)

2. 専門と教養並行させて

大学の教養課程についての論議がありましたが、私も現在の教養課程のあり方には問題があると思います。というのも、私自身教養部に在籍した二年間は専門外の授業に興味ももてず、無意味に過ごしてしまったからです。

私は理系の学生ですが、人文科学、社会科学といった専門外の科目の中にも理系の学生が学ぶべきものは多くあると思います。しかしながら、受験勉強を終えて教養課程に進み、知識を詰め込むことにしか慣れていない頭が、物事を深く、総合的に考えなければならぬ学問を受けつけるようになるまでには、かなりの時間を要すると思います。専門外の学問に興味がでてくるのはむしろ大学三年、四年くらいになり、専門についての知識が深まってきたころからなのです。

従って大学の前半が教養課程で、後半が専門課程と区切ってしまった現在のカリキュラムの組み立てに問題があると思うのです。学生の学習意欲を高めるために、専門科目は初年度から多く取り入れられるべきですし、専門以外の学問は学生が学びたいと思うときにいつでも履習できるようにすべきです。また、現在教養課程にしかない語学、体育といった科目は三年、四年になっても必要だと思います。

大半の学生が教養課程を無駄に過ごし、
大学を卒業すれば偏った知識しかもたない
人間をつくりだしてしまう現状を、大学関

係者は見直してほしいと思います。

(大学院生 23歳)

「香川大学一般教育部」創設15周年を祝して

小林 立

「香川大学一般教育部」が「教養課程委員会」、「一般教育部準備教官会議」、「一般教育担当教官会議」を経て昭和46年7月、正式に発足してから、今年で満15年を数えている。また昭和45年2月、「一般教育担当教官会議」が『一般教育研究』の発行に関する要項」を定め、翌昭和46年10月に創刊号の発行以後、回を重ねて第31号が発行される運びになっている。これらのことは真に慶賀すべきことであり、関係者各位の多大のご苦心とご尽力に対して深く敬意を表したいと思う。

その間、「香川大学一般教育部」にとって重要な意義をもつ事柄が数多く生まれていると思われるが、学内的に見た場合、二つの事を挙げることができるのではないかと思う。

一つは昭和52年4月に一般教育主事の職が法制化されたことであろう。『香川大学三十年史』(121頁)によると、昭和51年1月、教養部を置かない2学部以上の国立大学20大学による「国立大学一般教育担当部局協議会」が設立され、教養部を置かない国立大学の場合、一般教育担当責任者の職を一般教育部長又は一般教育主事として法制上位置づけ、一般教育責任主体を制度的

に確立することを提案し、昭和52年4月一般教育主事制として実現されたという。言うまでもなく「香川大学一般教育部」は香川大学の内部組織であって法令によるものではなかった。従って、一般教育主事の職が法制化されたことは、いわば国家による強力な挺子入れが行われたということであり、「香川大学一般教育部」のその後の発展にとって、その意義は決して小さなものではないと言ってよいのではあるまいか。

昭和46年7月の「香川大学一般教育部」の創設は大学自治の精神の発揚であると言って間違いないだろうと思われるが、大学の内部組織であることから種々の困難が伴うことも免れ得なかったと言えるに違いない。当時の「香川大学一般教育部」が置かれていた状況については、『香川大学一般教育部関係資料集』(昭和57年度改訂版59~62頁)所収の昭和47年10月一般教育部教官会議から一般教育運営協議会に提出された「一般教育責任体制について(要望)(第2次案)」,昭和48年4月一般教育部教官会議から香川大学長に提出された「一般教育部を部局として扱うことについて(要望)」などの歴史的な文書を通じて、その一端は窺い知ることができると言ってもよい

のではないか。そのような当時の状況を打開するために、恐らく昭和51年1月、「国立大学一般教育担当部局協議会」は結成されたものに相違ないだろうし、その運動の成果として実現された一般教育主事の法制化がもつ意義は極めて大きいと評価されてよいのではないか。

「香川大学一般教育部」の理念の一つに「三学部から等距離」（昭和56年4月法学部創設以後は四学部と言うべきだが）がある。一般教育主事の職の法制化は、「各学部から等距離」の理念を「香川大学一般教育部」が実行しやすい環境を整備したと云うことができるのではないだろうか。

一般教育部にとって重要な意味をもつと思われる二つ目の事柄としては、教育学部の大学院設置の問題を挙げることができるのではないだろうか。教育学部は既に大学院設置の概算要求を一般教育主事法制化と

同じ年の昭和52年6月に提出しておられるから長年の宿願であると言ってよいだろう。「香川大学一般教育部」の理念の一つに「一般教育部の教官定員は、別表のとおりとし、その身分は教育学部に所属するものとする」がある。従って大学院設置は教育学部教官内部の専門分化を実質的に一層促進する要因としても作用しうるとしてよいのではないだろうか。

21世紀まであと15年。「香川大学一般教育部」は創設15年の数々の実績と輝かしい成果を踏まえて、今後の15年間、どのような充実と発展を見せることであろうか。21世紀初頭、「香川大学一般教育部」は創設30周年と「一般教育研究」第61号発行を如何なる状況のもとで迎えているであろうか。期待される所は極めて大きいと言って決して過言ではあるまい。

講道館柔道、タイを往く —その8—

村田直樹

前号迄のあらすじ

一人から三本取る、という法外な八人掛けを無事に終え、ホッとしてシャワールームへ歩いていく途中、知的な光をキラリとその瞳に漂わせるタイの青年に呼び止められた私。

八人掛けという理由も定かならぬ抜き勝負を観衆の中でじっと見詰めていた、と言う。八人掛けは、結局は力の誘示か、とも言った。

ジャージャーと頭を叩くシャワーの水が、火照った身体に気持良かった。あの青年は一体何を言いたかったのか。その思いが、シャワーの雨の中で私の脳裡を掠めていた。

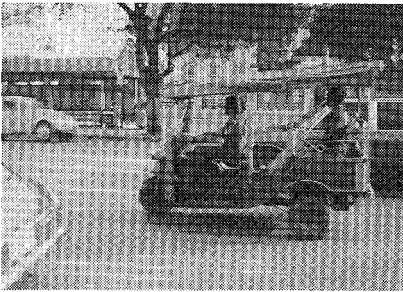
* * *

午後の指導がない時は、よく国際交流基金の事務所へ行く。其処には図書閲覧室が在り、日本文化に関心のあるタイやヨーロッパの学生、一般の人々がよく出入りしていた。基金側も、そういった人々のニ-

ズに、より豊かに応えるべく、情報サービスに余念がない。そして、その作業こそ国際交流基金の基幹活動とのことだ。

私が基金事務所へ出掛けるのは、其の閲覧室へ行くのが目的。其処で出逢うタイの学生や一般の人と交流するのがとても嬉しいのだ。日本文化に興味関心ある彼等と話していると、こちらの思いも奇らぬ点を指摘されたりして、新鮮な知的興奮を賜わ得ること請合なのである。

スクンヴィット大通りへ出、例によってサムロー（小型三輪タクシー）を止める。値段を交渉して、基金事務所へ。



「走れっ、サムロー！」

英国大使館に至るより前、一つ目の四つ角を右に折れれば、やがて左側にヒルトンホテルの瀟洒な建物が迫り、その次にそのヒルトンを遙かに凌ぐ白亜新築のヴァニットビルが真青な熱帯の空にそびえ立つ。その4階に事務所が在る。外は相変わらず熱いのだが、何故かこのビルのふもとには風が舞って心地好い。だからサムローを降りても、風は頬を撫でていた。

ビルのロビーを通り抜け、エレヴェーターに向かうと、恰度沢山の人がエレ

ヴェーターから吐き出されてくる処だった。

「大きなエレヴェーター……。」

中へ入るといつもそう思った。やがて聞こえるコンピューター・ボイスの低い声、

「Floor four.」

エレヴェーターを出て、磨き抜かれたフロアをツカツカツと皮靴の音も小気味好く正面に歩いて行けば、基金事務所ドアに突き当たる。The Japan Foundationと英語の表示が透明のガラスドアに書かれてい、その下に Open, Close の時刻が表示されている。ドアは透明だから中が見える。

ドア越しに受付の机と、その横にタイプライターが置かれてい、基金の職員がいつも盛んにタイブを打っている。此処に採用されるのに、30 数倍の難関を通り抜けた美人秘書はタイ人で、英語・日本語ベラベラ。日本語の方は敬語も相当こなせる水準を持ち、私などその秘書のしゃべる日本語の正統性に、時々脱帽させられたものだった。

一般にタイ人の応待は温かい。そしてその温かさが最後迄消えない。この理由は何だろう、とよく考えさせられたが、一つの試答は応待の際の微笑であった。何とも柔らかない。そしてもう一つ、話し方。こちらに伝えられるそれらのメッセージは穏やかで、特に女性の艶やかな微笑と柔らかな話し振りを香水のように振り掛けられると、あーら、僕チャン、「腕をさしいでたるが円らかにをかしげなるほど……」などと「源氏」の「宿命」じゃないけれど、何となく円やかな気分浸されてしまうのだ。(この

気分大好き。)

ドアを押して入れば例のタイ美人秘書、

「先生、今日ワ。お元気ですか？」

とタイプの方から面を上げた。異国の人から奇麗な日本語で挨拶されるのは、とても愛しく嬉しいものだ。

「ハイ、有難う。元気ですよ。」

「今日も熱いでしょ、外は。アハハハ……。」

日本語の挨拶の勉強で、天候のことを言うと言った彼女は、習った通りを話し、熱帯地方のこととて熱いのは当たり前だから、そのことを揶揄して笑うのだった。

「熱い熱い。どうしてパンコクはこう熱いんだ。もう嫌になるぜ。でも、このオフィスは好いネ、涼しくて。」

そんな他愛ない遣取りのうちに彼女は席を立ち、冷たい物を取りに行く。私共“派遣専門家”ということで、事務所の職員は何かと気を遣ってくれるのだった。タイの甘いジュースを一気に飲みほし、私は閲覧室の方へ。今日もまた、何人かの人が机に向かって。ヨーロッパでの閲覧室と違って、書物に目を落しているその顔、顔、顔は皆黒髪で、日本人とそっくり。全然異国を思わせない。私は、フロアー右手の書架へ行く。書架の奥に人影が在り、不躰を承知でそちらに眼差を向けた瞬間、

「アッ。」

と息を呑んだ。

「貴方は……！」

と私が言い掛けると殆ど同時に、書架の前に立つその青年は振り向いた。間違いない。この間の八人掛けの後、シャワールームへ行く途中で私に話し掛けてきたあの青年だ。あの青年が其処に居た。

「サワディークアップ、アチャーン。」

とタイ人特有の微笑を見せた。

「サワディークアップ。どうして此処に居るの？」と私。

「日本の経済史関係の本を探しているのです。それにしてもまたお逢いしましたネ。嬉しいですよ。」

「イヤァ、偶然だね。此処で逢うなんて。好かったら冷たいモンでもどう？少し話もしたいし。」と私は妙にノっていた。

「ええ、喜んで。じゃア、出ましょうか。」

「いいの、本の方は？」

「ええ、いいですよ。」

という訳で外へ出ることになった。決まれば行動は速い。私は基金事務所の所長に挨拶をしてドアを押した。それから勿論、ドアを閉める時、美人タイピスト嬢にウィンクを忘れず――。

「なーんだ、そうだったの。どうりで色んなことを聞いてくると思ったヨ。」

(笑)

「ええ。そういう訳で、私の留学先でもあった日本は私のテーマの一つでもあ

るのです。だから色々……。」

ヴァニットビルを出て、近くのレストランでの会話である。

件の青年、名はスリチャイ＝ワンケーオ。(Surichai Wangaeo) 1949年ランブーン生まれ。一年間アメリカ留学の後、チュラロンコン大学卒業。1971～79年東京大学大学院に留学、修士・博士課程終了(社会学専攻)。現在、チュラロンコン大学政治学講師。主要論文に「タイに於ける農地改革と社会発展——日本の例と比較して」「The Significance of Socio-Political Factor in the Japanese Development Experience,」「Green Revolution in Thailand: Its Economic Consequences and Sociological Implications for Rural Communities」など。訳書にルース・ベネディクト著『菊と刀』(共著)がある。

此处で少し彼の話に耳を傾けたい。スリチャイは自己紹介を兼ねて、以下の様な話をした。

私は北部タイの農村地帯ランブーン県パーサン郡ソプター村に生まれた。高校を卒業した時、運よくアメリカン・フィールド・サーヴィスの奨学金を受けて、ミネソタ州の小さな田舎町に一年間留学することができた。

帰国してチュラロンコン大学に入学して、四年生の時、日本の発展振りに非常に興味を持ち、勉強したいと思っていたところ、たまたま日本政府の留学試験にパスして1971年4月に日本に留学。当時常に抱いていた疑問は、「日本は何故成功したのか、

日本の成功は日本人と近隣諸国の人々にとって、どのような意味を持つのか」という点であった。

日本に留学した初めの頃は、私の国も日本と同じ位に急速な発展ができるものかと思ひ、「あと何年たてばタイ国は日本に追いつけるだろうか」という設問をたててみた。しかしその後日本の急速な発展の下で、この国の人々の生活に生じたさまざまな問題を知るようになると、こういう設問は適当でない、ということに気づいた……。

「スリチャイ、その設問が適当でないということだけど、一体どういう風にだいたい？」

私はコーヒーを啜りながら聞いてみた。彼はニコリ微笑みながら(＝そう、これが例のタイ・スマイル!)話を続けた。

設問が適当でないというのは、第一に現代の日本社会を到達すべき理想の社会、あるいは理想に近いもの、と考えていたことで、まず、この考え方に批判の必要を感じたこと。第二に日本の歴史的発展の方向が、近隣諸国やその国の人々の暮らしとはあまりにもかけ離れたものであったこと、が明らかになったから。そして、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などと言って、世界の範として日本を礼賛すればする程、日本社会の矛盾、例えば環境破壊、といった問題に触れずに、見過ごすことになる。国内の青少年に対しては、教科書を改竄し、過去の侵略戦争の歴史的事実を隠蔽して語らず、バラで飾った表面上の素晴らしさや発展ぶりを出版物に盛り込む。専ら一方的な見方と、当座のことしか教えないのは、今後の開発政策に活かそうとする学問にとっ

て、又、若い世代にとって欠陥と言えると思った。

話が次第に Serious になってきた。彼はというと、佳境に入りつつあるようで、その英語の流暢さが加速度を増していた。タイのインテリで英語をしゃべる人は、大抵米国留学を経ている。音がきれいで、かつ、熱意が伝わってくる英語だった。

私も言った。

「日本の社会がいろいろな面で発展を遂げていることは、最早、誰も否定しないだろう。世界経済が不況にあっても、日本は先進工業国の中でも際立って安定している。後発の発展途上国の社会開発への努力はタイもそうだと思うけど、一般に日本の過去百年間の発展課程の検討などせずに日本の発展を真似ようとする傾向を感じるんだけど、どうだい？」

「Yes, I agree. 日本の発展は、その方法を真似て誰もが達成できるような、一般のお手本になるようなものではないと思います。」

「そうそう。こんにちは日本の近代化の出発点となった明治維新から第二次大戦までの発展の背景、又、それ以後、そしてこれらの発展が、後発の発展途上国に対して持った意味等々、おさえておくべき側面は幾つかあるよネ。」

「Yes, I think so, too. 私はタイの発展と日本との関係、又、タイ国にとっての開発の在り方等について考え、日本の人々に知って戴きたい、と思っているのです。」

「あーそう。熱心で好いねㇿ。」

と答えて、日本の人々に知って戴きたい、という言葉が耳に残った。何故だ——？

と、つらつら考えているうちに、ハッとなった。思い当たる節にぶつかったのである。

日本製品不買運動。これである。タイで約10年程前に、日本製品不買運動なるものが起こった、ということを想い出した。当時の田中角栄首相のバンコク訪問を前に起こったその運動は、学生代表が抗議文を田中首相のもとに届けるだけにとどまらなかった。十万人に及ぶ全国の学生を動員して、「日本製品ボイコット旬間」が実施されるまでに発展した。それは、東南アジアで初めての、そして東南アジアで最大の反日製品運動だったのである。(どうも不調だな、日本は……。)私は独り言を言った。スリチャイは、続けた。

「私の勤めるチュラロンコン大学では、アジア研究所、社会学研究所などの有志を中心に、“日本製品反対運動後10年経って、よくなったのは何だろう”という長い名前のシンポジウムを開きましたㇿ。」

そう言って、彼はそのシンポジウムの冒頭で朗読されたという詩を紹介してくれた。その詩は、日本製品不買運動なるものが起こった当時の、日本製品が氾濫する実態を的確に伝えていた。

私はその詩を聴いているうちに複雑な思いに浸され、朗読するスリチャイの顔を凝視した。

で、その詩の内容は——？

つづく。